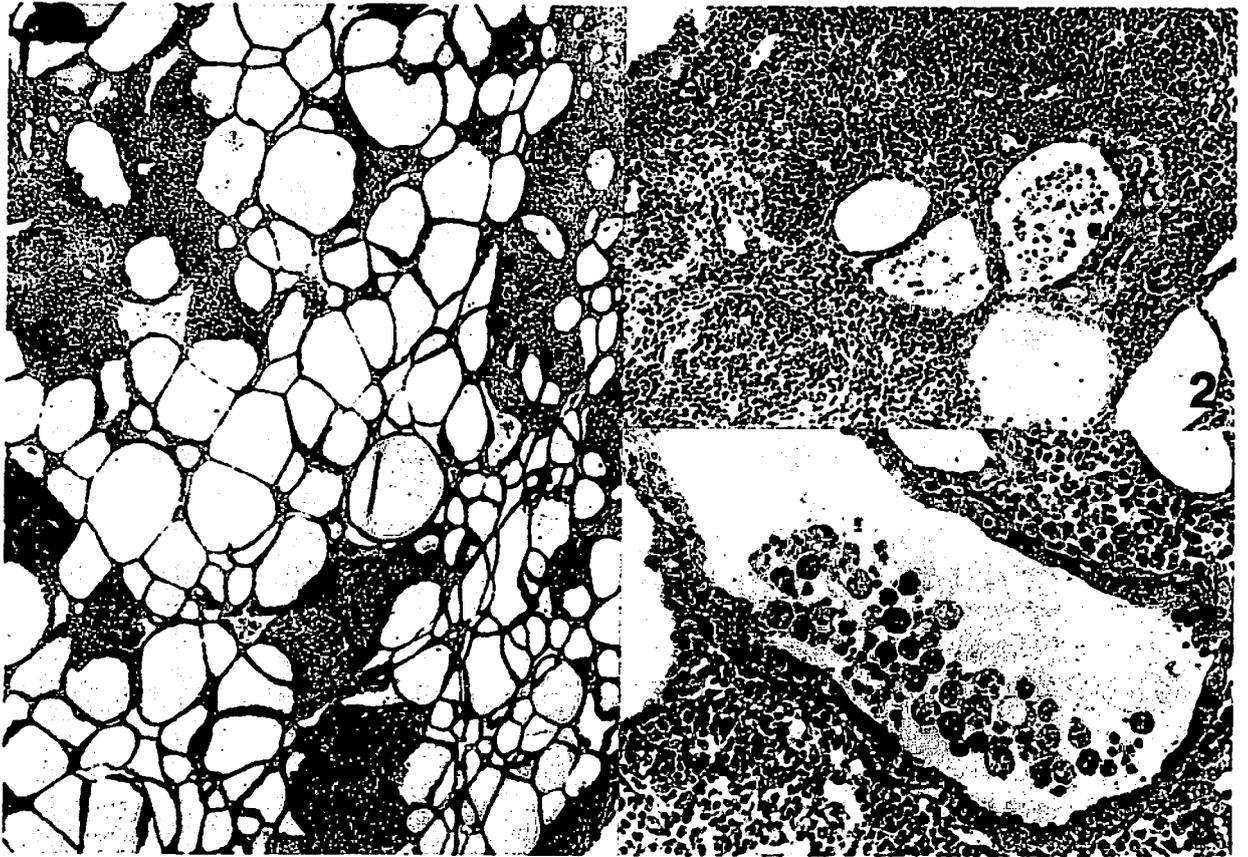


# 鶏の甲状腺

日本生物科学研究所出題 第27回獣医病理学研修会提出標本No.471



動物：鶏，Fayoumi種（YL系），雄，19ヶ月齢。

臨床事項・剖検所見：当所で育成中の本鶏群に，換羽後の羽毛が白色になる個体が少数出現し，そのうちの1例から提出標本を作成した。肉眼的に甲状腺断面の透感度がやや減少していたが，他の諸器官には全く異常は認められなかった。

病理組織学的所見：甲状腺は左右いずれもリンパ系細胞が高度に浸潤し，小胞の半数近くが消失していた（図1，H & E，×32）。細胞浸潤の強い領域では，リンパ濾胞形成とともに多数の形質細胞を認め，持続する抗原刺激と活発な lymphocytopoiesis ならびに抗体産生を伺わせた（図2，H & E，×120）。残存する甲状腺小胞にはしばしばリンパ系細胞が浸潤し，腺上皮の配列の乱れや空胞変性，小胞内への脱落など壁の破壊を伴っていた。小胞内にはリンパ球，形質細胞とともに大食細胞の浸潤が顕著で，大食細胞のほとんどが肥大した細胞質内に多数の膠質様滴状物を含んでいた（図3，H & E，×240）。これら小胞の膠質は減少して淡明あるいは水様を呈し，腺上皮の多くは立方ないし円柱状で自由側には無数のPAS陽性分泌顆粒を持ち，機能亢進状態を示していた。この他本症例では羽の白色化を襲づける所見として，羽のメラニン含有細胞の変性・崩壊とそれらに対するリンパ系細胞の反応が認められた。

異常鶏の多くには甲状腺組織抽出物を抗原に用いたELISAで自己抗体が検出され，また血中T<sub>4</sub>値は正常鶏より低い傾向にあった。

考察および診断：提出標本に見られたリンパ系細胞の高度な浸潤とリンパ濾胞形成，ならびに小胞の積極的な破壊等は，ラット，鶏，犬，マモセットなどで報告されている自己免疫性甲状腺炎の組織像に類似するものであった。本病を遺伝的に易発する鶏としてOS (obese) 系が良く知られ，その臨床，病理組織学的ならびに血清学的特徴が人の橋本病のそれらに類似することから，疾患モデルとして利用されている。OS鶏甲状腺炎の発病機構として，母鶏からヒナへ移行した抗thyroglobulin抗体の補体結合性あるいは抗体依存性細胞介在性の標的細胞傷害とBリンパ球の甲状腺上皮への直接作用が考えられている。また羽の白色化（メラニン欠乏症）の易発系としてDAM (delayed amelanosis) 鶏が知られており，本病の発生にはメラニン細胞の遺伝的異常と鶏の各種抗原に対する免疫学的高度反応性などの関与が示唆されている。このDAM鶏の選抜交配により，リンパ球性甲状腺炎を併発する個体が出現することが最近報告され，両疾患の発現に共通の遺伝的素因が絡んでいることが想像される。提出標本に対する診断名は，その組織学的特徴から“鶏の亜急性リンパ球性甲状腺炎”とした。